余生の文学
——名随筆家としての吉田健一

文芸評論家・エッセイスト　宮崎智之（みやざき　ともゆき）

Essay　時の調べ

本欄には「Essay」という言葉が付けられている。エッセイは日本語では「随筆」とも呼ばれるが、フランスのミシェル・ド・モンテーニュの「エセー」が起源とされる。エッセイと表記するのが、最近ではこの自由な散文形式のしきたりとなっているようだ。私は日本における随筆／エッセイをめぐる問題にこだわって、論考などを書いてきた。『枕草子』『方丈記』『徒然草』の「日本三大随筆」はあっても、近代以降の文学史では、随筆／エッセイの存在感は大きいとは言えない。しかし当然のことながら、近代以降もわが国は、名随筆家、名エッセイストをあまた輩出してきたし、私は随筆／エッセイを歴とした「文学」であると考えている。ここでは随筆とエッセイの違いには踏み込まないが、一般的には随筆と表記したほうが文学の趣が増すことに同意する人は多いだろう。

そんな名随筆家の一人に、吉田健一（1912～1977）がいる。大久保利通の曾孫にして、戦前に内大臣などを歴任し、二・二六事件で青年将校らに襲撃された牧野伸顕の孫、そして昭和の大宰相・吉田茂の長男として生まれた吉田は、政治ではなく文学を志した。批評、小説、翻訳など幅広い活動を展開したが、随筆家としての功績を私は高く評価する。酒、食、交遊、人生、文学、文明といったテーマを行き来し、融通無碍な名文をたくさん残した。

その中でも出色の作と名高い『余生の文学』は、1969年に新潮社から発行された。長らく古書でしか手に入らなかったが、2023年11月に平凡社ライブラリーから復刊され、再び脚光を浴びた。随筆集とも評論集とも呼べる一冊だが、表題作は人生論としても読める作品なので、本稿では随筆集の立場を取る。

表題作『余生の文学』ほど、私を励ました文章はない。現在42歳の私は、余生にはまだ早いだろうか。だが、吉田の考える余生の境地は、必ずしも年齢にしばられるものではない。吉田は若さ故に抱く焦燥を、「自分に何が出来るか解らなくてそれでも何かやって見たいというのは厄介な状態であるが、若いうちはその状態にある他ないようで、やって見なければ自分に何が出来るか解らない」と的確に言い当てる。一方、「年を取って自分に何が出来るか解るというのは自分の限界を知ることでもあって、年とともに自分の能力に限界がないことが明らかになって来る天才もある訳であるが、それが無限であることも含めて限度がはっきりすることはそれだけ仕事の狙いを定め易くして、これも熟練に欠かせないことの一つである」と余生の効能を説明する。

若い頃には何でも挑戦できる。それはそうなのだが、そこにはある欺瞞（ぎまん）が存在する。何でもできるが故に、かえって照準が定まらず、空回りし、身動きが取れなくなる。選択肢が多い現代には、よりそういった経験をする若者が多い。ここに、若さと年を取ることを逆転させた「余生」の概念が立ち上がってくる。曰く「(…)我々は若くなる為にも年を取る他ないのである」。吉田の考える余生とは、夕暮れ時に空を飛ぶ鳥が感ずるような、優雅で自由でそれでいて確かな時間を指す。創造性が宿る解き放たれた豊穣さを、「余生」という言葉に託したのであった。

私の父は71歳で亡くなった。その時、私は35歳で、人生の折り返し地点をはじめて意識した。「人生100年」と言われている時代としては早過ぎると思うが、意識せざるを得なかった。これまでの人生で成し遂げられなかったことに思いをはせた。そんな折に、『余生の文学』を再読し、心の底から救われた思いがした。随筆の妙味はこういった時にこそ発揮されるのだ。人生に寄り添う文芸スタイルである随筆／エッセイを、「文学」として継承していかなければならないと強く思った。その瞬間、私は若返り、「余生」を獲得したのであった。

発行：平凡社

略歴
1982年、東京都出身。著書に『平熱のまま、この世界に熱狂したい　増補新版』（ちくま文庫）、『モヤモヤの日々』（晶文社）など。共著に『つながる読書——10代に推したいこの一冊』（ちくまプリマー新書）など。現在、『文學界』（文藝春秋）にて、「新人小説月評」（2024年1～12月）を担当している。